

# 「野の鳥は野に」の 理念を社会に定着させるために

日本野鳥の会会長  
上田恵介

1950年大阪府生まれ。理学博士。動物生態学者。立教大学名誉教授。鳥類を中心とした動植物全般の進化生態学、行動生態学を専門とする。かたわら、環境問題の研究にも取り組む。野鳥や自然に関する一般書の執筆、テレビ・ラジオ出演では、柔らかく、わかりやすい解説に定評がある。1963年の小学生の頃から、日本野鳥の会会員。2015年6月に日本野鳥の会副会長に就任。2019年6月より会長に就任。



# 事業報告

## 2024(令和6)年度

2024年3月11日、日本野鳥の会は創立90周年を迎えました。皆さまの支援のもと、野鳥と人が共に生きる社会を目指して、1世紀弱にわたって自然保護に取り組み続けています。新たにスタートした90周年記念事業をはじめ、2024年度の活動を報告します。

### B

生きものと共生できる風発を！

は海洋プラスチックの問題です。海洋に漂うペットボトルやポリ袋、浮きや網といったプラスチック製の廃棄漁具などが、アホウドリやウミガメなどからまることや、誤食の問題を抱えています。さらに深刻なのはマイクロプラスチックなのです。紫外線などで劣化して、どんどん細くなり、プランクトンと一緒に海洋生物が体内に取り込んでしまっています。この問題は一朝一夕で解決はできませんが、拡大生産者責任の徹底などの法改正も含めて国レベルでの解決を求めています。身近なぐらして使い捨てプラスチック製品をなるべく使わない、採鳥会に合わせてごみ拾いをするなどの活動からも、この問題を多くの人に知ってもらおうことが大切だと感じています。

当会は原発にかわる自然エネルギーの導入・推進に賛成しています。では自然エネルギーのための風力発電はどうかという問題が出てきます。私たちは風力発電すべてに反対という立場はとっていません。ワシ類やハクチョウ・ガン類、夜間に渡る小鳥類などの、頻繁な衝突が予測される地点に設置される風力発電施設には反対するという立場です。

4月に、当会のウトナイ湖サンクチュアリ(北海道苫小牧市)に行ってきました。サンクチュアリのレンジャーたちとの交流と、ウトナイ湖を囲むタンチョウやチュウヒが生息する勇払原野に計画されている風力発電施設について、現地の保護団体の方々からの意見聴取と現地視察が目的でした。

風力発電施設の建設が計画されているのは勇払原野の東側にある厚真町浜厚真地区です。ここはウトナイ湖サンクチュアリに近接し、自然度の高い湿原、草原、湖沼等がまとまって存在し、多数の希少動植物が生息・生育しているエリアです。雪が溶け、枯れたヨシが一面に広がっている早春の勇払の湿原には、真っ黒になった夏羽のノビタキのオスたちがあちこちにとまっています。その上をチュウヒが悠然と滑空しています。オオジシギは到着したばかりのようで、盛んにディスプレイフライトを繰り返していました。最大6羽ものオオジシギが「ズ



勇払原野で地元紙に取材を受ける上田会長

日本野鳥の会(以下、当会)は創立90周年を迎えました。日本で最も歴史のある、そしていまや国内最大の自然保護NGOです。会が創立されたのは昭和9年、それ以来90年間、当会は日本の自然と野鳥の保護に取り組んできました。

これらの鳥以外は北海道ではシマアオジとチュウヒそしてサンカノゴイ、伊豆諸島ではアカコッコとカムリウミスズメを対象に、サンクチュアリのレンジャーと地元で連携団体が参加、協力して、地元自治体や住民と一緒に保護活動を繰り返し続けています。世間ではほとんど注目されていない鳥たちも、種類によっては個体数を減らし、絶滅の危険を抱えているのです。

当会が現在、重点的に取り組んでいるのはシマフクロウやタンチョウだけではなく、シマフクロウやタンチョウだけではありません。

この湿原ではタンチョウの繁殖も確認されています。2017年に最初のつがいが発見され、その後、それ以降、定着して繁殖を繰り返しています。これを地元むかわ町の「ネイチャー研究会 in むかわ」や当会の苫小牧支部、一般社団法人タンチョウ研究所、ウトナイ湖サンクチュアリのレンジャーたちがずっと見守っています。

私たちの理念

地域で採鳥会を開催し、さまざまなイベントを企画し、「野の鳥は野に」という私たちの理念を社会に定着させるために、全国の連携団体の皆さんが日々奮闘しておられます。いつも思うことですが、こうした全国津々浦々における皆さんの活動が、私たち日本野鳥の会の力の源泉になっています。現在までに紆余曲折はありましたが、私は当会の90年という歴史は重宝と思っています。そして私たちに負わされた責任は大きいと考えています。

鳥たちに優しい社会は、人にも優しい社会です。野鳥を保護することは、この国の豊かな自然を保護することにつながります。さらにそれは自然界の一員でもある人間の健全な暮らしを守ることに繋がります。未来の子供たちのために、新たな活動に踏み出していきましょう。

上田会長が折々に綴る  
トップメッセージ  
2か月ごとに更新中です!  
ぜひご覧ください  
<https://www.wbsj.org/about-us/message/>

# 2024年度事業を振り返って

日本野鳥の会 理事長  
遠藤 孝一



1958年生まれ。当会理事長。日本野鳥の会栃木県支部副支部長、NPO法人オオタカ保護基金代表。長年、栃木県を中心に自然保護や環境教育、猛禽類の保護や研究に取り組む。現在、里山で生きものを育む農業を営みながら「サシバの里自然学校」を運営。著書に、『オオタカの生態と保全』（共編著、日本森林技術協会）、『日本のタカ学』（分担執筆、東京大学出版会）など

85の支部と協働しながら、野鳥を中心にした生物多様性の保全活動や政策提言、野鳥や自然を愛する活動を広げるための普及活動等に取り組みました。以下に、その成果を報告します。

## 自然保護事業

絶滅のおそれのある種の保護については、これまで取り組んできたタンチョウ（湿原）、シマフクロウ（森林）、カンムリウミスズメ（海洋）に加え、上述したように新たにチュウヒ（原野）を取り上げ、各種の保護事業を積極的に展開しました。また、クロットラヘラサギに関する情報収集やマナヅル、ナベヅルの越冬地分散事業、アカコッコやオオジシギの保護活動も継続しました。

シマフクロウについては、3つがいのシマフクロウが利用する流域にある1.3ヘクタールの土地を購入し、新しい野鳥保護区を設置しました。これによって、当会の野鳥保護区は、4千ヘクタールを越えました。チュウヒについては、国内最大の繁殖地であるサロベツ原野とそれにつぐ繁殖地の勇払原野において、繁殖状況を調べました。また、地域の大規模イベントへの参加、勉強会や観察会の開催を通じて、地域での保護機運の普及・醸成に努めました。風力発電や大規模太陽光発電等が、立地によって

野鳥の衝突事故や生息環境の消滅につながることから、自然エネルギーの問題にも取り組みました。環境省等による5件の検討委員会に委員として参加して提言を行うとともに、問題のある自然エネルギー発電事業計画に対しては、20件の意見書および要望書を支部等と連名で提出しました。

海鳥への影響が懸念される海洋プラスチックごみの問題については、使い捨てプラスチックの削減や持続可能な社会の実現に向けて普及啓発するために、一般向けオンラインセミナーを3回開催し346名の参加がありました。親子向けには対面講座やオンライン講座を各1回行い61名の参加がありました。さらに、プラスチックによる海鳥や海洋生態系への影響を把握するための調査を、研究機関と共同で行うとともに、会員や一般にも呼びかけて、プラスチック類の野鳥への被害状況について情報収集を行い、52件の報告を得ました。

市民科学としての野鳥観察の促進とデータの活用を進めるために、コーネル大学と共同で運営している「eBird Japan」については、参加者拡大を目指して愛鳥週間やバードウォッチングウィーク、Global Big Dayにキャンペーンやイベントを行い、合わせて約千人の参加がありました。また、識別アプリ「Meini」を紹介するウェビナーを2回行い、約200の参加がありました。

## 普及事業

野鳥や自然の素晴らしさや大切さを広める普及活動は、自然保護活動とともに重要な活動です。

その活動の中心は、全国各地の支部によって開催されている探鳥会です。今年度の全国の探鳥会の年間参加者は約6万9千人になり、ほぼコロナ禍前の水準に戻りました。また近年ではオンラインイベン

トも人気があり、当会主催で開催した26回の講座には、年間で約2万3千人が参加しました。

ツバメの巣を見守る企業・団体を表彰する事業では、19支部の推薦等により20都府県の31の企業・団体に対して感謝状を贈呈しました。この模様は全国25の新聞・テレビ等で報道され、当会のPRにも貢献しています。野生動物との関わり方について考える機会を提供する「野鳥の子育て応援（ヒナを拾わないで!）」キャンペーンも、日本鳥類保護連盟や野生動物救護獣医師協会とともに継続し、ポスターを11万枚制作して全国の学校や施設等に配布しました。

## 財政

当会は国や地方自治体からの補助金等に依存せず、運営財源の大半を会費や寄付金、受託事業や収益事業として行う物販事業による収入によってまかなっているNGO（非政府組織）です。

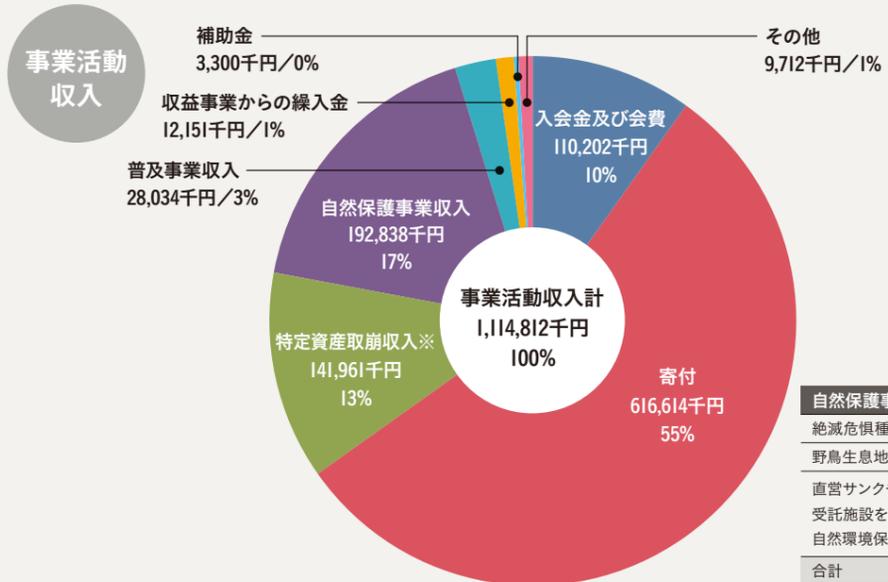
下図に示すように、2024年度について年間約6億5千万円規模の公益活動を行いました。これらの活動費は、①入会金および会費 ②寄付および寄付を特定資産化した資産の取崩収入 ③受託収入等の自然保護・普及事業収入 ④収益事業からの繰入金、の4つのおもな財源からなっています。

2024年度は、会員からの会費が約1億1千万円、会員も含む支援者からいただいたご遺贈やご寄付は約6億1千7百万円にのびりました。収益事業からの繰入金も1千2百万円となり、それぞれの収入が当会の公益活動を支える大きな財源となっています。

今後も、こうした皆さまからの付託にこたえられるよう、野鳥を通して自然に親しみ自然を守る運動を推進してまいります。引き続きご支援くださいますよう、よろしくお願いいたします。

## 2024年度決算のご報告

この決算報告では、当会の「公益活動に関する決算数値」を、支援者の皆さまにわかりやすいよう、一部集計し直しております。公益法人会計基準に従った財務諸表等は、当会HPをご覧ください。



2024(令和6)年度決算の事業活動収入合計額は、11億1,481万円でした。入会金及び会費は前年度比で微減傾向が続いております。今年度は、特にご遺贈や大口寄付をはじめ、沢山のご寄付によるご支援をいただき、大幅に収入が増えました。 ※特定資産取崩収入は、特定の目的のための積立資産(主に過年度のご寄付)を、目的に沿って支出するために取り崩したものです。

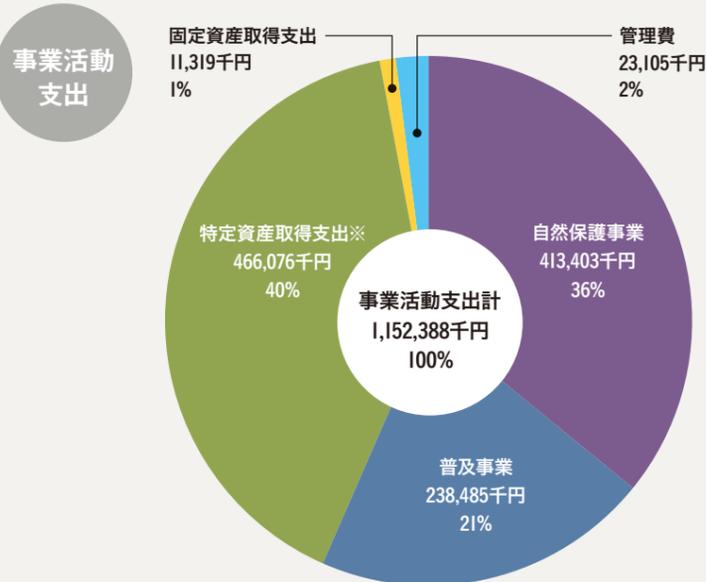
### 当会事業計画や決算について

日本野鳥の会 決算 検索



事業内容	金額 (千円)	割合 (%)
絶滅危惧種の保護活動	45,625	11%
野鳥生息地の保護・保全活動	119,846	29%
直営サンクチュアリ・受託施設を拠点とする地域の自然環境保全活動	247,932	60%
合計	413,403	

事業内容	金額 (千円)	割合 (%)
普及・教育・啓発活動	213,465	90%
広報・出版活動	20,811	9%
その他	4,209	2%
合計	238,485	



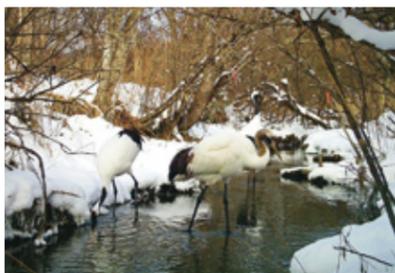
事業活動支出の合計額は、11億5,239万円でした。希少種やその生息地を守る自然保護活動やオンラインや各施設における普及活動等を積極的に展開いたしました。今年度いただいたご寄付の多くを次年度以降の資産として積み立てたため、特定資産取得支出が増えました。 ※特定資産取得支出は、次年度以降特定の目的のために使用する資産を積み立てたものです。



アカコッコの森づくりの参加者



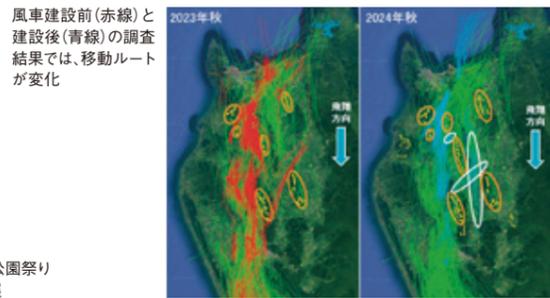
GPSロガーを用いた夜間調査の様子



整備した自然採食地を利用するタンチョウの親子



ほろのべ名林公園祭りでのブース出展



風車建設前(赤線)と建設後(青線)の調査結果では、移動ルートが変化

## 自然保護事業

### ● 自然エネルギー対策事業

2024年度も、北海道北部に建設された複数の風力発電施設で、ガン・ハクチョウ類の渡り鳥が風車を避けて飛ぶ「障壁影響」が、発生しているかを確認する調査を春と秋に実施。実際に障壁影響(移動ルートの変化)が発生していること、また、移動ルートの変化のしかたが昨年度の結果とは違うことを確認しました。これらの調査結果を、本誌の他に日本鳥学会やいくつかの講演で紹介しました。この調査は、2025年度も継続します。また、9月にフランスで行われる、風力発電が野生動物に与える影響に関する国際学会(CWV2025)でも「障壁影響調査の結果を発表する予定です」。

また、連携団体の皆さんと協力しながら、意見書・要望書をのべ21件提出しました。そのほか、行政機関が主催する各種の協議会や検討会に委員、オブザーバー、専門家ヒアリング対象者として参加し、行政機関や事業者に対して直接提言を行いました。

### ● チュウヒ保護事業

2020年から北海道北部のサロベツ原野で、2021年からは北海道中部の勇払原野でチュウヒの繁殖状況調査を実施しています。2024年度はサロベツ原野の営巣密度が高い民有地で9つがいを対象に、勇払原野では弁天沼から風力発電事業計画地で7つがいを対象に調査しました。繁殖成功率はサロベツ約55%、勇払原野で約43%でした。

サロベツ原野にある幌延町でチュウヒ観察会や勉強会を開催し、ほろのべ名林公園祭りにブース出展をし普及活動を行いました。ウトナイ湖サンクチュアリーネイチャーセンターでは、サポーター向けの観察会を開催しました。なお、サロベツ湿原センターとウトナイ湖サンクチュアリーネイチャーセンターで

このほか、オーストンウミツバメを対象に、プラスチックによる海鳥への影響を把握するための調査を研究機関と共同で実施。会員や一般に呼びかけてプラスチック類の野鳥への被害状況について情報収集を行い、計52件の報告がありました。

### ● タンチョウ保護事業

タンチョウの給餌への依存度を下げるために、北海道鶴居村の冬期自然採食地で、首都圏の大学生や地元ボランティア、企業のCSR活動により、タンチョウのエサとなるエゾアカガエルなどの生きものを増やす整備を行いました。冬に行った餌資源量調査では、エゾアカガエルを含む16科20種の生きものを確認。また自動撮影カメラの画像解析により、タンチョウが同所を安定して利用していることが確認できました。このほか、鶴居村主催の「タンチョウ再発見から100年フォーラム」では、タンチョウ保護に貢献した団体として、地域の保護関係者や団体とともに当会も鶴居村より感謝状をいただきました。

### ● カンムリウミスズメ保護事業

カンムリウミスズメの営巣数を増やすため、静岡県神子元島と福岡県の鳥帽子島で人工巣を設置しました。これまでの置きだけでなく、両島に2階建ての人工巣を設置し、上段の人工巣においてもカンムリウミスズメの出入りが確認できました。利用数も増え、安定して利用されるようになってきました。また、神子元島がある下田市教育委員会主催の連続歴史講座において、カンムリウミスズメの保護活動について講演したほか、帝京科学大学と共にGPSロガーを用いた利用海域調査も実施しました。

### ● オオジシギ保護調査/ツル分散事業

気候変動対策と生物多様性保全は同時に解決する必要があります。両者間のトレードオフ解消が重要です。

は、昨年に続き、チュウヒの生態や保護活動を解説するパネル展示を行いました。

### ● eBirdの運営と利用促進

コーネル大学鳥類学研究室と協働で、世界最大の野鳥観察データベース「eBird」の日本語版「eBird Japan」を運営。愛鳥週間とバードウォッチングウィークを中心に、バードウォッチングの記録をeBirdに投稿するキャンペーンを実施しました。あわせて、オンラインセミナーを開催し、eBirdと野鳥識別アプリ「Merlin」の楽しみ方を紹介。5月10日のグローバル・ビッグデー(世界一斉野鳥カウント)には、都立東京港野鳥公園で「東京港野鳥公園ビッグデー」を開催し、eBirdの使い方を解説して投稿を呼びかけました。eBirdを初めて使う方には、ガイド「これを読めばわかる! eBird & Merlinの使い方」を発行し、PDFと印刷物で配布しました。また、日本鳥学会でeBirdの利用状況とデータの活用事例をポスター発表し、eBirdに蓄積されたデータの調査研究への活用を呼びかけました。こうした活動を通じて、eBird Japanの利用者は約9千400人、観察記録は約25万件に達しました。

### ● 海洋プラスチック対策事業

プラスチック汚染の地球環境への影響や、国際条約の動向を多くの方に知ってもらえるよう、オンラインセミナーを4回開催し、2千人以上の参加がありました。そのうち1回は夏休みに親子・家族を対象に行い、プラスチックの削減や流出を防ぐために自分たちができることを考えました。また、減プラスチック社会を実現するNGOネットワークの一員として、マイクロプラスチックの発生源となる人工芝への助成金の見直し要望書を提出したほか、WFジャパンとともに国際プラスチック条約の政府間交渉委員会に向けて政府との対話を行うなど、政策提言活動を行いました。

オオジシギ生息地と太陽光発電所建設適地の重複、ツル類が越冬する水田地帯での秋耕の影響軽減などを調べ、政策提言等を行いました。

### ● アカコッコ保護事業

伊豆諸島の三宅島で、生息状況を把握するための個体数調査を島民15名の参加を得て実施。推定個体数は約9千600羽でした。また、アカコッコの利用地域を把握するため、GPSロガーを用いた調査を継続して行い、今回は2つが回収できました。オスの成鳥が越冬期に島内の山の中腹に行くことがわかったため、1月に現地を確認するなど、越冬期の環境についても情報収集を行いました。3月には林内の環境を整備するイベント「森づくり」を開催したほか、協定旅館の協力で島内のアシタバ畑に水場を設置しました。

### ● シマフクロウ保護事業

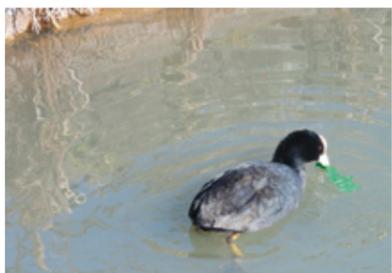
根室地域でシマフクロウの生息地1.3haを購入し、野鳥保護区を拡大しました。また、日高・根室地域の給餌場には合計160kgの魚を追加し、釧路・根室地域に設置している4基の巣箱を維持管理しました。モニタリング調査として、日高地域の給餌場を実施している近くの河川の支流において通年で餌資源量の調査を行い、春や秋の魚類遡上期には資源量が多くなる一方、冬季から初夏にかけての繁殖期には資源が少ない状況であることがわかりました。また、釧路地域の日本製紙株式会社社有林では、鳥類スポットセンサスによる継続的な調査を実施し、個体数や種の変化を把握しました。

普及活動としては、シマフクロウに関するオンライン講演やイベント出展、地域の子どもたちとの植樹などを通じて野鳥保護の重要性を広く発信し、市民の理解と関心を高める活動に力を入れました。



東京港野鳥公園では絶滅危惧種のサンカノゴイが人気を集めた(次頁一ツ目の項目の写真)

標識再捕獲のための印を捕獲した魚につける



エサと間違え弁当に使われるバラをつつくオオバン



「これを読めばわかる! eBird & Merlinの使い方」



東京港野鳥公園ビッグデーの様子

# B

## 力強いご支援を、ありがとうございます!

鳥にも人にも優しい社会をめざす仲間が、  
日本野鳥の会の活動を支えています。  
昨年度もたくさんの個人・法人の皆さまから、  
ご寄付や協賛をはじめ、物資のご提供、ボランティア活動など、  
さまざまなご支援をいただきました。  
ご寄付の総額は、6億1,661万3,873円にのぼります。  
心より感謝申し上げます。

ご寄付へのお礼として、  
野鳥の応援団「バードメイト」のピンバッジをはじめ、  
オリジナルの野鳥グッズをご希望の方へプレゼントしています。  
2024年度は、日本野鳥の会の創立90周年を記念した  
特別デザインもご用意しました。



### 皆さまの応援で「バードメイト」の輪が大きく広がりました



日本野鳥の会東京 副代表  
行徳自然ほごくらぶ 理事  
石亀 明氏

#### 連携団体からの応援コメント

日本野鳥の会東京の探鳥会で、バードメイトの寄付を募っています。集めた寄付金は、そのまま財団へお送りしています。探鳥会が終わった後、さっと帰られる方も多いのですが、参加者の皆さんともう少し鳥に関する雑談ができればと思い、そのきっかけとして20種類ほどを集めて寄付を募るようになりました。そうすると、参加者の皆さんもその時の思い出の品が欲しくなるのか、バードメイトの鳥に関する質問などが多く出て、良いコミュニケーションのきっかけになっています。毎回お会いするたびに寄付いただける方や、一気に数種類分の寄付いただける方もおられ、帽子などにバードメイトのピンバッジがずらりと並んでいるようすが目にとまると、話題のきっかけになっています。



2025年度の  
バードメイトは  
「スズメ2025」  
です!

バードメイトは2025年度からリニューアル。  
どうか引き続きよろしくをお願いします。

詳しくはこちら ▶



「日本を彩る美しい鳥」。  
羽根の色をテーマに  
野鳥を楽しむヒントを  
提供したポスター

ツバメの巣を見守る「東武  
鉄道株式会社 高坂駅・森  
林公園駅」(埼玉県)へ感  
謝状を贈呈



### ● サンクチュアリへの来訪者が好調

当会が運営に関わるサンクチュアリへの来訪者数が、ここ10年で最多を記録しました。コロナ禍の2020・2021年度には極端に減っていた来訪者が、前年度から回復し始め、直営の鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリでは過去最高の8千人弱を記録。また受託型の都立東京港野鳥公園では、19年ぶりに5万人を超え、根室市春国岱原生野鳥公園でも14年ぶりに1万人を超えました。今後とも、野鳥の生息地を保全しつつ、多くの方に自然の大切さを体感してもらおうと、運営していきます。

### ● 普及事業

#### ● ツバメの子育てを見守る団体に感謝状を贈呈

ツバメと人との共生が続くことを願い、ツバメの子育てをあたたく見守ってくれている企業や団体に、感謝状を贈呈しています。2024年度は、支部から贈呈先の推薦を受け、あわせて20都道府県31の団体に感謝状を贈呈しました。各団体の取り組みは、当会ホームページで紹介したほか、各地の地方紙等でも取り上げられました。

#### ● 初心者向けバードウォッチングを全国の支部と開催

バードウォッチングを通して野鳥や自然に親しむ方を増やすため、全国の支部と共催で「初心者向けバードウォッチング」を開催しています。双眼鏡の貸出や丁寧な解説などの工夫をし、初めての方も楽しく参加できる探鳥会です。1年間、全国22の支部で計83回開催し、のべ2千3百人が参加しました。

#### ● バリアフリー探鳥会への取り組み

だれもがバードウォッチングを楽しめるよう、探

### ● 鳥会のバリアフリー化に関する取り組みをすすめています。2024年度は、視覚障害者も参加できるバードリスニング講座や、個別支援学級の中学生たちとの野鳥観察などを行いました。また、横浜自然観察の森で車椅子利用者の利便性を考えるため職員向けのワークショップも開催しました。活動を通して、参考となる情報や手法を集積しました。

#### ● ポスター『日本を彩る美しい鳥』を発行

「羽根の色」に注目し、日本で見られるカラフルな鳥たちを、色ごとにグラデーションで並べたポスターを制作しました。保護色や構造色など、羽根の色に関する豆知識も紹介し、色の美しさやおもしろさを通して野鳥に興味を持ってもらえればと企画しました。2月から年度内に約5500部を配布しました。

#### ● 野鳥に関するオンラインイベントを開催

全国の会員や支援者の方、野鳥に興味を持つ方を対象に、さまざまなオンラインイベントを開催しています。2024年度は、「オンライン探鳥会」や、「初心者のための安西さんのオンライン野鳥講座」など、年26回のイベントを開催し、約2万4千人の方が視聴しました。

#### ● 高音域がクリアに聞こえる集音器「探聴サポート」を商品化

年齢を重ね、高音域の音が聞こえにくくなった方にも、野鳥の声を楽しんでほしいとの想いから、バードウォッチング用の集音機の商品化に取り組んできました。試行錯誤の末に商品化にこぎつけ、利用した方からは、「世界が変わった」「ヤブサメの音が聞こえた」などと喜びの声をもらいました。



探聴サポート

オンライン探鳥会では  
現地の野鳥のようすを  
リアルタイムで画面越し  
に紹介

